



アフリカ体験記 モザンビークで感じたこと

榴岡児童館スタッフ 白川 一希

「アフリカ」という言葉からどんなことを想像するだろうか。サバンナ、動物、奇抜な衣装で歌い踊る人々、発展途上国、貧困国……数年前は私もアフリカを一括りにして、ステレオタイプのイメージを持っていた。しかし小学校の教員として子供たちに途上国の話をする機会に、その実際を自分の目で見て知りたいと思い、青年海外協力隊（現 JICA 海外協力隊）への参加を決意した。

派遣国となったのはモザンビーク共和国。アフリカ大陸の東端に位置し、日本と同様に南北に長い国だ。ポルトガルに支配されていた歴史があり、公用語はポルトガル語。最初に到着した首都マプトの中心街には、ポルトガル時代に作られた建物が今も残っていたり使われていたりして、町並みからはイメージしていたアフリカ感はほとんどなかった。

空港から首都の中心街へ車で移動する途中、大きなバスプールとロータリーを通り過ぎた。ごった返す人々、鳴り響くクラクション、そして所狭しと立ち並ぶ露店や簡素な商店、路上に広げられた野菜や果物……「メルカド」と呼ばれる市場の集まりを見て、初めてアフリカにやってきたのだという実感を持った。

モザンビークの人々は外国人に対しての抵抗は少ない。路上でもバスの中でも飲み屋街でも自然と挨拶をするし世間話もする。そして外国のことに興味津々で何でも質問をしてくる。大人であっても子供のようだ。

好意的に接してくる人もいればその逆もある。モザンには中国人が経営する商店などが少なく、カンフー映画も非常に人気がある。必然的にアジア人を見れば中国人だと思われ、「チンチャンチョン」と中国語を真似して声をかけてきたり、「シーナ（中国）」と呼ばれたりすることも日

常茶飯事だった。そして逃げる……徐々に言葉にも慣れ、中国人いじりに対抗しようとした矢先に全カダッシュで逃げられたのも、今となってはいい思い出である。

私の活動先はマプト市郊外の住宅密集地にある「東洋の星小学校」だった。全部で 14 しかない教室に対して、全校児童数はおよそ 3,500 名。当然一斉に全学年が授業を行うことはできず、朝・昼・夕の三部制で授業を行っていた。高学年（6・7 年生）は一クラス当たり 80 名前後の児童が在籍しており、教室にぎっしりと並べられた机でも足りず、床に座って授業を受ける子供がいるのも普通の光景だった。体育館やグラウンドもなく、体育の授業は近所の空き地で、朝礼は中庭を使って行っていた。電気も不安定で、早朝の薄暗い教室で電気もないまま授業を行うこともあった。

日本と比べれば過酷な教育環境に通う子供たちだが、よくも悪くも日本の子供と変わらない。学ぶことが本当に好きで授業外でも一生懸命な子供もいれば、授業中には話を聞かず他教科の宿題をやったり、始業時刻が過ぎてからのんびりと登校したりする子供もいる。学校が好きだったり嫌いだったり、友達とちょっかいを出しあったりして、授業が終われば家に帰れるのが嬉しい子供たち……その光景は日本で日々見ていたものと変わらないように思えた。

アフリカと一括りにしていた遠い世界も、知ればグッと身近になる。

まずは知ろうとする
ことの大切さを実感する
1 年 2 カ月であった。

